

第4回POPコンテスト

弘前大学附属図書館では、今年度も図書館の利用促進及び読書推進を目的として POP コンテストを開催いたしました。第4回を数える今回は計 25 点の応募があり、作品は全て該当図書と共に館内特設コーナーに展示されました。そして、図書館利用者（一般利用者を含む）からのシール投票、および Web ページからの投票によって、全 6 作品の入賞が決定いたしました。

表彰式は 11 月 14 日（水）に本館アクティブ・ラーニング・エリアにて行われ、それぞれの受賞者に郡館長から表彰状が手渡されました。

今回は、本のテーマに合わせてドットイラストや文字をデザインに組み込み『人工知能の作り方：「おもしろい」ゲーム AI はいかにして動くのか』（三宅陽一郎著）の魅力をアピールした理工学部 1 年・込山ひなたさんが大賞を受賞し、かわいらしい手書きイラストとキャッチコピーを貼り付けて立体感を出し『ぼくのニセモノをつくるには』（ヨシタケシンスケ作）を紹介した教育学部 4 年・田川香純さんが優秀賞を受賞しました。その他 3 名の方が、それぞれ工夫をこらした POP で佳作を受賞しました。また、今回もサンライズ産業株式会社様にご協賛いただき、特別賞としてサンライズ産業奨賞を設けました。サンライズ産業奨賞は、多読コーナーの『Pele』を紹介した理工学部 3 年・篠原爽吾さんが受賞し、サンライズ産業(株)の工藤代表取締役から表彰状が手渡されました。得票数が多かった作品の中から「地域」をテーマにした作品を選ぶ予定でしたが、今回は「地域」をテーマとした作品の中に受賞候補が無かったため、サンライズ産業(株)寄贈図書の購入対象の一つである「グローバルな人間形成に役立つ資料」を取り扱った作品として、この作品が選ばれました。

表彰式では、受賞者からの喜びの声や作成した POP について工夫した点、そして「この本を読んで欲しい」という熱い思いが語られました。POP と該当図書はしばらく展示する予定ですので、気になる本がありましたらぜひ借りてみてください。

（投票結果についてはこちら→http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/guidetop/pop/pop4_kekka.html）

（情報サービスグループ 丸山 ひかり）



郡館長（前列右）サンライズ産業(株)工藤代表取締役（前列左）
工藤取締役管理部長（後列左）及び、受賞者



表彰式

大 賞

理工学部1年 込山 ひなたさん

『人工知能の作り方：「おもしろい」ゲームAIはいかにして動くのか』

この度は、第4回 POP コンテストの大賞という素敵な賞をいただいたこと、大変感謝しております。ありがとうございました。

図書館で「人工知能の作り方」に出会った時、最初に表紙のイラストに惹きつけられました。手にとって読んでみると、普段私たちがしている行動を言語化することがどれだけ難しいことなのか、ゲームAIの歴史についてなど、AIの専門知識が無い私でも理解し、楽しむことができる一冊でした。普段、理工学部で主に化学を学んでいる私にとって、AIは離れた存在であったかもしれませんがこの本によって新たな見方を得られたと思います。

この本をPOPで紹介するにあたって、直線的なイメージのデザインにすること、文字をデザインに組み込むことを意識して作成しました。機械が持つ直線的なイメージを図形の組み合わせによって表現し、「言語化」というキーワードをデザインするためにたくさんの文字をPOP内に入れました。このPOPを見て、少しでも多くの方に興味を持っていただけたら幸いです。

最後に、私のPOPを見てくださった方々、投票してくださった方々、企画運営をしてくださった附属図書館関係者の方々、協賛のサンライズ産業(株)の方々、本当にありがとうございました。



優 秀 賞

教育学部4年 田川 香純さん

『ぼくのニセモノをつくるには』

私は幼い頃から絵を描くことが苦手で、イラストを描くということを全く行ってきませんでした。しかし、大学に入学してあるイラストを描き、それを友人に褒められ、その嬉しさがきっかけでもっと絵を描いてみようと思うようになりました。

ちょうどその頃縁のある方から、大人も楽しめる絵本があるぞ!と紹介してくれたのがこのヨシタケシンスケさんの絵本です。絵を描くということにもっと挑戦してみたい、弘大の図書館を訪れる方に絵本で癒されてほしい、その思いから応募することになりました。

応募期間開始から数日後、2階の階段を上がり恐る恐る自分のPOPを目にしてみると、既にたくさんシールが貼ってありました。その時の喜びはきっと今後忘れないと思います。このPOPコンテストを通じて自分の“できること”の幅が広がり、またコンテストを通じて繋がれた人がいます。応募してよかったな、と心の底から思います。そしてここを出発点としてこれからもイラストを描いたり、大切な人に絵本の良さを伝えていきたいです。



サンライズ 産業(株)賞

理工学部3年 篠原 爽吾さん
『Pele』

この度はサンライズ産業(株)賞に選んで頂き、ありがとうございました。

私がこのPOPコンテストに応募したきっかけは、英語の授業の課題として出されたことでした。私は普段から読書をしないため、本を読んで、さらに、POPを作らなければいけないということを苦に感じていました。そこで本を探している時に「Pele」を見つけました。私はサッカーが好きだったため、即決でこの本に決めました。最近では気になることがあれば、すぐインターネットで調べられることもあり、わざわざ本で読むということをしなくなっていました。しかし、本でペレについて読むと感情が動かされることを感じました。インターネットとは違い、しっかりと自分の中に情報が入ってるのを実感しながら本を読むことができました。



さて、これをどうPOPにしようかと考えていたときに、ロシアワールドカップを見ていて、「大迫ハンプないって」の応援フラッグが目につき、これだと思い、POPを作りました。流行に乗っていて、ふざけたようなPOPに見られるかもしれませんが、面白半分でもこの本を取って見ていただければ幸いです。

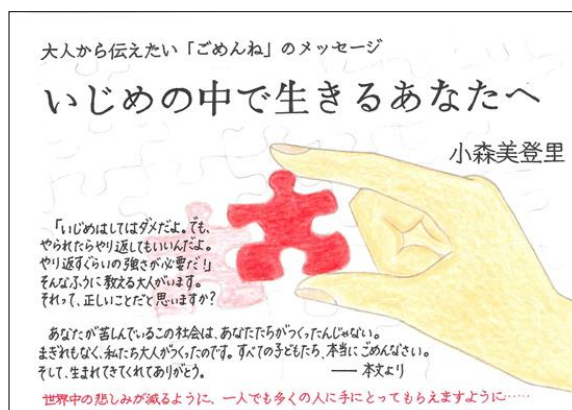
佳 作

教育学研究科1年 工藤 由紀さん

『いじめの中で生きるあなたへ：大人から伝えたい「ごめんね」のメッセージ』

この度の佳作受賞、大変嬉しく思います。まずは、企画運営に携わられた図書館の方々、協賛のサンライズ産業株式会社様、そして投票して下さった皆様に心から御礼申し上げます。

さて、私は現職の中学校教員で、今年の春から教職大学院で勉強させていただいています。学内のお気に入りの場所の一つが附属図書館なのですが、そこでこのコンテストのポスターを拝見し、今回大学院での思い出づくりの一つとして書かせていただきました。



この本とは、自身の研究テーマである不登校に関する資料を探している時に会いました。いじめを苦にして自殺した15歳の一人娘・香澄さんについて、お母さんが書かれた本です。その中でとても印象深かったジグソーパズルのお話をPOPのデザインにしました。

私自身が教師として、そして一人の大人として考えなければならないことを改めて教えてくれたこの本を、これから先生になろうとしている教育学部の皆さんにはもちろんのこと、多くの皆様に読んでいただき、優しい心がどんどん広がっていくことを願いながら描きました。そんな思いで描いたPOPを選んでいただけて光栄です。この度は本当にありがとうございました。

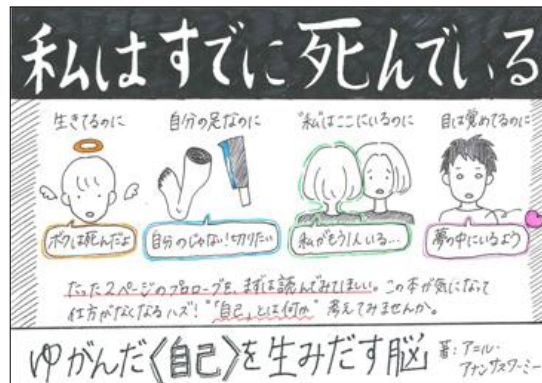
佳作

医学部3年 馬目 華帆さん

『私はすでに死んでいる：ゆがんだ「自己」を生み出す脳』

この度は、「私はすでに死んでいる：ゆがんだ<自己>を生み出す脳」で佳作を頂いたこと、大変嬉しく思います。ありがとうございます。

レポートで必要な本を探しに久々に図書館に入って、なんとなく目に留まり手に取って読んでみた本の、たった2ページのプロローグ。たった2ページの文章が、普段本を全く読まない私にPOPを描くまでの興味を抱かせました。この本は、コタール症候群や身体完全同一性障害、離人症などといった病気について、当事者へのインタビューや、実験、違法手術の取材などを通して神経科学の視点から迫っていくとともに、「私は誰なのか?」「自己とは何なのか?」について語っています。私はこの本を読んで、こんなにも深刻で悩まされ続ける心の病について、自分は知識もなければ今まで理解しようとしなかったことに気づいたと同時に、医療従事者を目指す者以前に人として罪の意識を感じました。POPは、少しでも気になってもらえるよう、書きたい沢山の情報を取捨選択し詰め込んだつもりです。POPを通じてこの本を読み、心の病についてどんなものがあるのか知って、人の心、そして自分の在り方を見つめるきっかけになればうれしいです。



佳作

人文社会科学部1年 秋本 聡美さん

『Beauty and the beast』

私が今回POPコンテストに参加したきっかけは、英語の授業です。Readingの授業で、一人一冊英語で書かれた小説を読み、その本のPOPを書くという宿題でした。英語の成績は悪いですが絵を描くことは得意なので、点を稼ぐチャンスだと思い、丁寧に仕上げました。提出したときは英語の先生にとっても褒められてうれしかったです。その授業の単位も取れました。

絵を見てだけでも「美女と野獣だな」と分かるようなわかりやすさと、野獣の毛の流れやバラなどの細かな部分もこだわりました。私は色を塗る道具を持っていないため、白黒でどうやってインパクトを出そうか悩みました。

「美女と野獣」は幼いころに読んで以降、ストーリーを忘れかけていましたが、授業をきっかけに久々に読み直しました。私がはじめて「美女と野獣」を読んだ幼いころに比べたら、今の私は世の中がいかにも外見の美しさが人の人生に影響を与えるかを知っています。必ずしも善人は幸せになり、悪人には罰が下るというわけではないということも。だからこそ、この物語は美しく、素敵だと思いました。

弘前大学図書館は小説などの種類は少ないです。しかし、英語の小説は書庫にたくさんあります。英語は苦手ですが小説は好きなので、読んでいこうと思います。

